

「もとはこちら」のお話し

№27 今月のテーマ

先天的な 病気の赤ちゃん



ある日の勉強会の先生

試練辛苦は

神の良薬 賜りもの

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

北原ゆり筆

沢山の人の祝福を受けて結婚して5年。知り合いの若い夫婦の間に、ようやく待ち望んでいた赤ちゃんが生まれました。色々あって帝王切開で生まれたその赤ちゃんは、普通よりも少し小さく、また逆子でもあったのですが、元気にすくすくと育ち、可愛らしい笑顔を見せるようになりました。

ところが定期健診の結果、体の一部に不具合が見つかり、治療を受ける為にこれから二ヶ月の間、入院の必要があると告げられたのです。しかも治療を受けても後遺症がのこる場合があり、生涯その後遺症と共に暮らさなければならぬかもしれないという事でした。

若い両親にとっては全く思ってもいなかった話で、寝耳に水、まさに青天の霹靂（へきれき）です。

泣き続ける親子

そんな話をその身内の方から聞かされました。

その方は、「赤ちゃんのことを思うと、気持ちが暗くなるし、可哀想でいたたまれない。とにかく治ってほしい。」

それから実はこの病気、名前は「先天性」とはなっているけれど、よく調べてみると、先天的にそうなって生まれてくるのは極一部の赤ちゃんだけで、大部分は後天的なものとのこと。多分その子の母親の育て方に問題があったのだらう。口に出して母親を責めるわけにはいかないけれど、やっぱり気持ちとしてはそう思ってしまう。

何故もつと早く気付いてやれなかったのだらう・・・。

そう言って、顔を曇らせた。

確かにその症状を引き起こす誘引は、赤ん坊の世話の仕方にある場合が多いようです。しかし今までの健診では、何も異常は見つかっていないかったのです。

事の経緯はともかくとして、その話を聞いて、実は私が真つ先に思ったのは、その若い母親の事でした。

今、何といつても一番辛い思いをしているのは、間違いないその赤ちゃんの両親、特に母親ではないかと思ったのです。

わが子がそういう状態にあるというだけでも、胸が潰れる程の辛い思いを味わっているのではないかと思うのですが、もしかしたらその原因が自分の育て方にあつたかもしれないとなれば、その思いは尚更ではないかと思つたのです。もしかしたら母親はいま、強く自分の事を責めているかもしれません。

赤ちゃんの治療はすぐにも始まるそうですが、聞く所によれば、最初の三日三晩はどの子も泣き続け、夜も眠らない場合もあるという事です。泣き続ける赤ちゃんを抱っこしながら、このお母さんも赤ん坊にも負けないくらい、心の中で泣き続けるのではないのでしょうか。

障害をどう受け取るか

話を聞きおえて、この赤ちゃんが治療を終えた後、なんの障害ものこらないことを心の底から祈った事は、今更申すまでもない事です。しかしそれよりも尚私が案じた事は、万が一にも、この赤ちゃんに後遺症がのこってしまった時の場合です。



大きくなって後、肉体の痛みや見た目の不具合を、親のせいだといって親を責めて困らせ、世をすねてひがんだ人間となって暗い一生を過ごすのか、それとも、そういう体を持った自分を潔く真正面から受け入れ、「自分も辛いが、

親はもつと辛く、苦しんでいるだろう」という様に、親や周囲の人の気持ちを思いやれる心の広い人となって、強く明るく逞しく生きていくのかという事です。

もしも後者のような人となって生きていく事ができたとすれば、親はともかくとして、誰よりも先ず真つ先に、当人である自分自身が救われるからです。

この親子とは別の、やはり同じ障害を持った娘さんとお母さんがおりました。このお母さんは折に触れ、わが子の障害のことを口にしておられました。

しかし決して娘さんを必要以上に哀れんだり、また自分を強く責めたりするような事は、一度もありませんでした。この母親のあふれんばかりの愛情と、「そんな障害に負けずに、強く逞しく、賢く生きよ」と励まされ続けて育つたこの娘さんは、成長した後、地域のリーダーとして色々な方面で活躍する人になりました。

そして周りの人々から、「あの人は本当に立派な人だ」と、当人が言われるだけではなく、その賞賛はその娘を育てた母親にまで及び、「この母親にして、この子あり」と言われるまでになったのです。

あつぱれなこの親子は、地域の人々を励ます泉となり、多くの人々に慕われ続けました。既にお二人とも亡くなられましたが、自分の運命に対する潔さと明るさ、そして他人に対する思いやりに満ちたお二人の姿は、今も沢山の人の心の中で生き続けているのではないかと思います。

~~~~~

たとえ同じ重さの荷物を背負わされたとしても、それをどういう心構えで背負うかによって、その人の生き方は大

きく変ってくるのです。障害をごみ芥だと思って背負えば、人生は耐え難く、苦しいものになるでしょう。しかし全く同じその障害も、もしもその人が、「これこそが自分にとっては何がたい宝物なのだ」と思って背負う事ができたとなれば、人生は単なる苦痛だけのものにはならないのです。



### この環境だからこそ、学べる事がある

本当は、痛みも哀しさも、辛さも苦しさも、そういう事はないのが一番です。しかし好むと好まざるに関わらず、それらが自分に与えられてしまった時、私達はいやおうなくその重圧を受け入れざるを得ません。

しかしその時、その重圧に押しつぶされ、怒りや悲しみだけのみじめな人生を送るのではなく、「この体だからこそ、この環境だからこそ、他では学び取れない特別な何かを、自分は学べるのだ」という事に気付く事によって人生は輝きを増し、明るく前向きなものに大きく変わってくるのです。

私達は、時にはあえてマイナスと思われる環境を選んで生まれてくる事があります。

それは「その環境の中でしか学べない大切な事」を学び、深い気付きを得るためです。

そしてまたその環境を通して自らの向上浄化さをはかり、より高次元の存在に近づいていく為でもあるのです。人生を通して私達が学ぶべき事は沢山あります。それは、どんな中からでも私達は幸せになれるのだという事です。

端的に言えば、幸せは自分でつくるものである、という事です。

二番目に学ぶべき事は、この世的な弱者も強者も、富める者も貧しき者も、健康に恵まれた者も病んでいる者も、老人も子供も、そしてまた白人も黒人も黄色人種も、人としての価値そのものは全く同じである、という事です。

人間に貴賤はありません。命において、私達はみんな平等です。一人ひとりが同等の個性を持って生きている仲間同士であり、私達は同じひとつの命を共有しているという事です。

平井先生がよく聞かせて下さった話を思い出します。盲目の子を持つ父親が、「なぜ、この子は盲目などという辛い状態で生まれてきたのですか？」と尋ねたところ、キリストは、「神は常に最良の事を与えたもう」と言って、一切の論議をせずに、静かに立ち去ったというお話です。

### 子供を通じて 親は成長

人には一人ひとり個性があり、また一人ひとり、立場の違いがあります。しかしどういった個性を持った人であれ、どういった障害を持った人であれ、老人であれ若者であれ、善人であれ悪人であれ、この世で生きる人に、只の一人として必要な人などという人は、絶対におりません。全ての人は、生まれてくる必要があつて生まれてきた、尊い命の表れです。

ところで私達は誰でも、自分自身が向上浄化し、幸せになる為に生まれて来て、そして生きているのですが、同時に実は私達全ての人が、単に自分ひとりが幸せになる為だ

けではなく、周囲の人たちを幸せに導くという大きな役割を担って、生まれてきているのです。

それは私達は根つこのところで、全ての人と繋がりあつて生きているからです。

一人の不幸は全員不幸につながり、一人の幸福は、全員の幸福につながっております。ですから、自分一人だけの幸せなどという事は、現実にはありえないのです。

~~~~~

そういえば、先の赤ちゃんのご両親も、共に一流といわれる大学を出て、一流企業の最先端で働く、いわゆるエリートの中のエリートです。経済的にも家庭的にも恵まれ、人も羨むような順風満帆の人生を歩んでいます。そんな彼らにとつての今回の赤ちゃんの病気の件は、順調な航海の真最中に、突然襲つてきた嵐のようなものであり、本当に辛い試練となることでしょう。

しかし与えられたこの試練を通して両親は、多分今まであまり気に留める事もなかった事、即ち様々な弱者の存在やそういう人達の悲しみや苦しみ、また人の情けや支えのありがたさ等々、多くの事に気付かされていく事になるでしょう。

それと共に、弱者によって支えられている自分自身という事にも、いつの日か必ず気付いていく筈です。

それらの尊い経験は、結果として、この若い両親を人間的にも霊的にも大きく育てる結果になる筈です。

ですからもしかしたらこの赤ちゃんは、両親を今までよりも一段も二段も素晴らしい人になつてもらう為に、あえて自らこの病を得て生まれてきたのかもしれない。勿論

その場合は、赤ちゃん自身もその事は、無意識層で納得済みであるはずで。

この様に、自分の親やその周辺の人達を、より大きく育て光明に導く役割を担って生まれてくる赤ちゃんが、結構多いのではないかと思います。

特に重い障害を携えて生まれて来る赤ちゃんの中には、そういう大きな役目を早々に果たし、幼くしてこの世を立ち去る場合が多い様な気が致します。

私達は、日々色々な体験をし続けています。良い事であれ悪い事であれ、自分がなぜこういう事を体験しているのかという事の原因を、表面的な事だけに求めて終わらせてしまうのではなく、もっと深いところにその根を求め、より強く深く、自分自身に問いかけてみたいと思います。

そしてその事を正しく問う為にも、「人生は、一度限りだけではない」という事と、「因果は巡る」ということの意味を、いま一度、改めて自らに問い直してみたいと思います。



編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP

<http://www.motoha-kochira.com>

mail:

data3@motoha-kochira.com

073・461・6300